

アクチュアルな言説分析理論の探究

高橋 均(光塩学園女子短期大学)

I. 問題の設定

1960年代のフランスに興った「構造主義」の主たる関心は、「主体」の外側にあって、主体の意識・行動を規定する言語構造や記号体系としての「構造」にある(Atkinson 1995)。フーコー(Foucault, Michel)は、その思想的潮流のなかで——彼自身、その理論的営為が構造主義の系譜に位置づけられることを拒否したのだが——言説や権力をめぐって新たな研究領域を開拓した、世界的に重要な論者のひとりである。今日、フーコーの影響のもとに展開された研究は、枚挙に遑がない。

イギリスの教育社会学者バーンスティン(Bernstein, Basil)もまた、フーコーから影響を受けた論者のひとりである。彼は、＜教育＞言説 pedagogic discourse 論の展開にあたり、「フーコーによる言説と権力に関する議論に周到な注意を払った」(Diaz 2001: 86)。

もっとも、バーンスティンは、フーコーの単なるフォロワーではなかった。彼は、フーコーの言説理論を「権力、知、言説の分析が、主体の言説的な位置づけの新たな形態を提示する強力な試み」として評価する一方で、フーコーの言説理論には、「社会関係」が欠如していると批判し、自らの言説理論とフーコーのそれとの間には、明確な差異が存在すると主張した(Bernstein 1990: 133)。

本報告では、バーンスティンが、フーコーの言説理論を批判的に受け止めつつ、自らのそれを発展させてきたことをふまえ、ふたつの作業を行う。第一の作業は、両者の言説理論の共通性をみいだすことである。この作業を通じて明らかにされるのは、バーンスティンがフーコーを経由して手に入れた言説分析のフレームワークの意義である。第二の作業は、両者の言説理論の差異を明らかに出すことである。この作業を通じて明らかにされるのは、バーンスティンの理論的「空白」が補完されることの意義である。

II. フーコーとバーンスティンの言説理論

II-1. 理論的共通性

バーンスティンとフーコーは、その言説理論において、言説編成を統制する「諸規則 règles

／rules」を措定している。フーコーによれば、「考古学」とは、「言表／言説」を可能にする諸規則の総体を明らかにする方法論である(Foucault 1969=1981)。フーコーにとって言説の考古学的分析とは、文字通り、言表／言説の背後に横たわっている言説編成の諸規則を「発掘」する作業に他ならない。

「考古学」における抽象的な議論から分析のレベルを規定し、可能な対象の領野を規定するという文脈に移して概念化されたのが「言説の秩序」である。「言説の秩序」は、「言説空間の外側にあって言説を統制・配分する諸規則」(禁止・分割と拒否・真理と虚偽の対立)と「言説空間内部での言説の統制・配分を司る諸規則」(注釈の原理・稀少化の原理・学問の原理)の総体として捕捉される言説編成のシステムである(Foucault 1971=1981)。

バーンスティンの＜教育＞装置もまた、言説を編成する諸規則の総体として概念化されている。バーンスティンは、特定の社会・文化的状況において、＜教育＞言説が恣意的・選択的に配分・脱配置・再配置され、不断の教育的コミュニケーションを通じて具現化されていく全体的過程、すなわち、「象徴的統制 symbolic control」を司る規制的・生成的原理について論じ、それを、「配分の諸規則 distributive rules」・「再文脈化の諸規則 recontextualizing rules」・「評価の諸規則 evaluative rules」の三つの諸規則の総体からなる＜教育＞装置として概念化した。

「配分の諸規則」には、フーコーの「言説の秩序」に相当する議論がみられ、それは内的(言説空間内部の関係)かつ外的(言説空間の外部との関係)な言説編成の原理として概念化されている。「配分の諸規則」は、「内的な秩序化 internal ordering」の原理をもち、それ自体の編成の原理に基づいて編成され、「深遠な知(考えることのできないもの unthinkable)」と「世俗的な知(考えることのできるもの thinkable)」との間に境界線を引く。同時に、この知の境界線の分割は、社会集団間の権力諸関係により規定される(Bernstein 1990)。このように、フーコーとバー

ンステインの言説編成の規則は、ともに内的かつ外的な規則として概念化されている。

II-2. 理論的差異

バーンステインはデュルケームの影響を受けつつ、「外側のものが、いかにして内側のものになるのか」(Bernstein 1978=1985)、つまり、社会的事実が、いかにして諸個人に内面化されていくのかに関心を寄せてきた。しかし、バーンステインとフーコーの言説理論の対照化から明らかとなるのは、バーンステインのそれにおける「社会的事実」に関する議論の不在である。

フーコーが『知の考古学』で展開した議論は、「社会的事実の内面化」=「秩序形成」の問題に、一定の示唆を与えている。「フーコー流の視線によって見えてくる言説の秩序とは、エミール・デュルケイム(ママ)がいう意味での「社会的事実」に近い」(赤川 2006:19)との指摘にあるように、フーコーの「言説の秩序」は、デュルケームの「社会的事実」として読み換え可能である。

言説によって創り出される秩序を「社会的事実」として措定した場合、その秩序形成にかかわるのは、言説の「厚み」(Foucault 1969=1981)という概念である。言説の「厚み」は、「ある言説の秩序においてくり返し語られ、増殖していく、強制力をもった饒舌な知」(内田 1996:41)として捕捉される。フーコーが問題としたのは、このような言説の「厚み」が、「それ固有の存在や強度を備え」、「人間から相対的に自律」し、「それを利用する人間の思考や行動を無意識のうちに方向づけるようなある種の強制力」をもっているということであり、「人はしばしばこの内在的な強制力やその作用に無関心であり、それをとくに意識しないまま受け入れてしまう」という事実であった(内田 1996:36)。

フーコー派の言説分析にあっては、「言説を「諸言表」の集積体(corpus)」として認識」(Kendall&Wickham 2004=2009: 93)し、そこに「社会的事実としての言説」をみいだしていくことが公準のひとつとなるが、バーンステインの言説理論において、言説の「厚み」に相当する概念化をみいだすことは困難である。

III. 結論

第一の作業からみいだされたのは、フーコーとバーンステインの言説理論が、ともに「規則への意志」と「言説空間の内的／外的視点」をもつという共通性を有しているということである。その理論的意義は、「言説空間内部の言説間

の関係(内部の諸関係 relation within)」——差異のシステムとしての言説空間の構築過程(どのような言説が語られ、排除・禁止されてきたのか)——と「言説空間と社会集団との関係(外部との関係 relation to)」(Bernstein 1990)——誰が言説の境界線を引き、特定の言説へのアクセスを制限するのか——に焦点を当てた分析を可能にする視点を提示している点にある。ただし、バーンステインの「教育」装置は、「内的／外的」に編成された特定の言説が、相互作用レベルで「意識」として諸個人に獲得されるまでの、マクロからミクロレベルの全体的過程の捕捉を可能にするフレームワークを提示しており、この点にフーコーの言説理論を乗り越える可能性をみいだせる(Bernstein 1990; 2000)。

第二の作業からみいだされたのは、フーコーに存在する「社会的事実としての言説」をめぐる議論がバーンステインの言説理論においては不在であるという、両者の理論的差異である。バーンステインの言説理論は、フーコーを経由して、言説の内的／外的関係をふまえた分析を可能にする、より体系化されたフレームワークを提示しているにもかかわらず、言説の「厚み」が、「もの」として諸個人を外側から拘束するという視点が不在であるがゆえに、言説を通じた「秩序形成」を説明することができない。

バーンステインの言説理論における言説の「厚み」をめぐる議論の不在は、フーコーの言説理論に伏在するデュルケームの社会実在論的視点が、バーンステインの言説理論へと接合される必要性を喚起する。「社会的事実としての言説」という視点が、フーコーを経由してバーンステイン理論に再配置され、バーンステインの言説理論における「空白」が補完されるとき、よりアクチュアルな言説分析の理論を、我々は手にすることができるのではないか。

【主な参考文献】

Bernstein, Basil (1990) *Class, Codes and Control*, vol. IV:

The Structuring of Pedagogic Discourse, Routledge.

——— (2000) *Pedagogy, Symbolic Control and Identity:*

Theory, Research, Critique, Revised Edition, Roman & Littlefield.

Foucault, Michel (1969) *L'Archéologie du savoir*, Editions Gallimard.

(=中村雄二郎訳 [1981] 『知の考古学』 河出書房新社)

——— (1971) *L'Ordre du discours*, Editions Gallimard.

(=中村雄二郎訳 [1981] 『言語表現の秩序』 河出書房新社)